

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖神 共 始

なきことばわがすくいのためえに
 言 吾 救 の た め え に

どうていぢよよりうまれしものをほめうとうて
 童 貞 女 生 者 を 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼおりしをしのびそのこ光
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまあえばなあり。
 復 活 給 賜 ば な あり。

【 克肖女マリヤのトロパリ 第8調 】

ははよ、なんぢのうちにかみのぞうによるもの
 母 爾 内 神 像 由 者

はたしかにすくわれたり。けだしなんぢは
 確 救 蓋 爾

じゅうじかをとりにてハリストスにしたがい、すぎ
 十 字 架 執 従 が い、す 過

やすきからだをかろんじ、ふしのものたる
 易 體 輕 不 死 者

たましいのたぬにおもんぱかることをおこない
 靈 爲 慮 行
 をもつておしえたり。ゆえにこくしょうなる
 以 教 故 克 肖
 マリヤよ、なんぢのしんはしよてんしとともによ喜
 爾 神 諸 天 使 偕 喜
 ろこびたもおう。
 給

【 克肖女マリヤのコンダク 第3調 】

こうえいはちちとこ と せいしん にきい
 光 榮 父 子 と 聖 神 に 帰
 す
 さきにいんこうにふけりたるものはいまはつ痛
 先 淫 行 耽 者 今 痛
 うかいによりてハリストスのよめとあらわあれ、
 悔 由 聘 女 現
 てんしのどせいにならいて、じゅうじかのぶき器
 天 度 生 效 十 字 架 武 器
 をもつてあつきをほろぼおす。ゆえに
 以 惡 鬼 滅 故
 しえいなるマリヤよ、なんぢはてんのくにの
 至 榮 爾 天 國

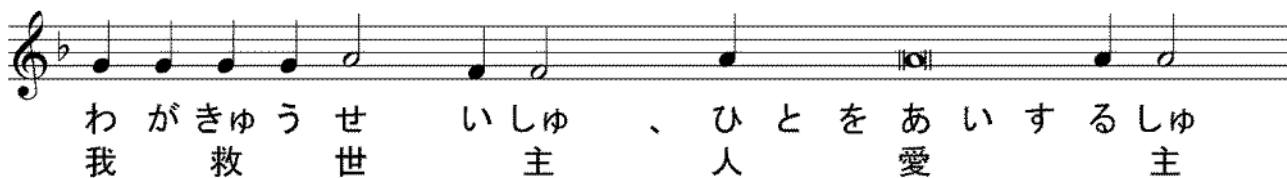


よめとあらわれたあり。
聘女 現

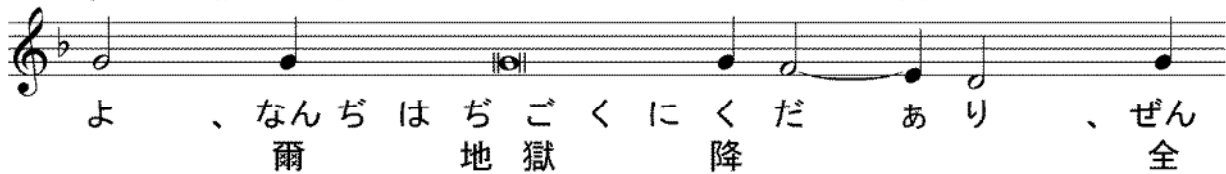
【 復活のコンダク 第5調 】



いまもいつもよよにい、アミン。
今 何時 世世



わがきゆうせいしゅ、ひとをあいするしゅ
我 救 世 主 人 愛 主



よ、なんぢはぢごくにくだあり、ぜん
爾 地獄 降 全



のうしゃとしてそのもんをやぶり、ぞう
能 者 其 門 壊 造



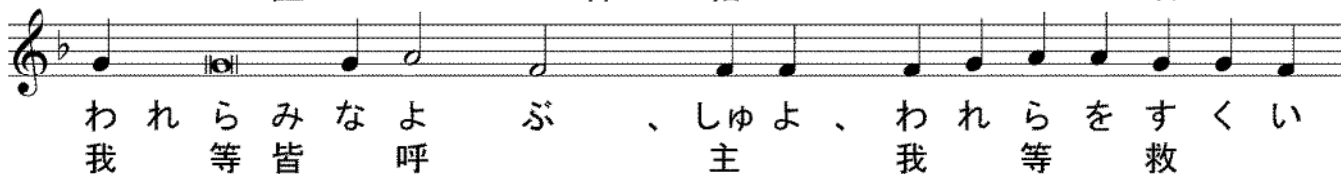
せいしゅとしいて、ししゃをおのれとともに
成 主 死 者 己 借



ふくかつせしめ、しのはりをくじき
復 活 死 刺 折 折



アダムをのろいよりときたまえり。ゆえに
詛 釋 給 故



われらみなよぶ、しゅよ、われらをすくい
我 等 皆 呼 主 我 等 救

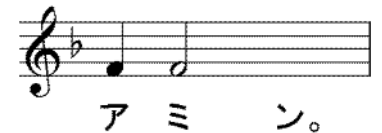


たま あ え。
給

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神
 に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世
 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第5調 及び克肖女の第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、

し ゅ よ 、 な ん ぢ は わ れ ら を た も ち 、 わ れ ら を ま も
 主 爾 我 等 保 我 等 護

りて、このよおよ り えい えんにいい
 斯 世 永 遠 至
 た ら ん。

誦經) ^{しゅ われ すく たま けだしぎじん た} 主よ、我を救い給え、蓋 義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよおよ り えい えんにいい
 斯 世 永 遠 至
 た ら ん。

誦經) ^{かみ なんぢ なんぢ せいしよ おい おごそか} 神よ、爾は爾の聖所に於て 嚴 なり、

か み よ 、なんぢはなんぢのせいしよにおい
 神 爾 爾 聖 所 於 い
 て おごそかな り 。
 嚴

【 アポστόロス 使徒經 321 半端 エウレイ書9章11節~14節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しよ よみ} 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい しょうらい ふく しさいちよう きた さら おおい さら ぜんび まく} 兄弟よ、ハリストス、將來の福の司祭長は來りて、更に大に、更に全備なる幕、

て つく ところ あら すなわちそのぞうしき あらざ もの よ おやぎ わかきおうし ち もつ
 手の造る所に非ず、即 其造式に非る者に縁りて、牡山羊と牡 犢 との血を以て
 するに非ず、乃 ^{あら すなわちおのれ ち もつ} 己の血を以て、^{ひとたびせいしよ い} 一次聖所に入りて、^{えいえん あがない え} 永遠の贖を獲たり。^{けだしも} 蓋若

おうし おやぎ ち およ わかきめうし はい けが もの そそ これ せい にくたい
し牡牛と牡山羊との血、及び 牝 犢 の灰は、穢れたる者に灑がれて、之を聖にし、肉體

けつじょう いた いわん せいしん よ きず おのれ かみ ささ ち
の潔 淨 を致さば、況 や聖 神に由りて、瑕なくして、己 を神に獻げしハリストスの血は、

われら りょうしん し おこない きよ い まこと かみ ほうじ
我等の良 心を死の 行 より潔めて、活ける 眞 の神に奉事せしむるをや。

(比較用 口語訳) キリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうでであろうか。

【 アポστόロス
使徒經 208 端 ガラティヤ書 3 章 23 節～29 節 】

誦經) けいてい しん きた さき われらりつぼう もと まも とざ しん あらわ ま
兄弟よ、信の來らざる先には、我等律法の下に護られ、閉されて、信の顯るるを俟

てり。か りつぼう われら みちび しふ われらしん よ ぎ ため
斯く律法は我等をハリストスに導く師傅たりき、我等信に由りて義とせられん爲な

り。しん きた のち われら すで しふ もと あ けだしなんぢらみな しん
信の來りし後、我等は已に師傅の下に在らず。蓋 爾等皆ハリストス イイスを信

ずるに由りて神の子なり。よ かみ こ なんぢらみな おい せん う もの き すで
爾等皆ハリストスに於て洗を受けし者はハリストスを衣たり。既

にじん もじん もなく、どれい じしゅ だんせい ぢよせい けだしなんぢらみな
イウデヤ人もエルリン人もなく、奴隷も自主もなく、男性も女性もなし、蓋 爾等皆

ハリストス イイスに在りて一なり。あ いつ も なんぢら ぞく すなわち えい
若し 爾等ハリストスに屬せば、則 アヴラアムの裔

たり、かつきよやく よ よつぎ
且 許約に由りて嗣子たるなり。

(比較用 口語訳) 兄弟よ、信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視されており、やがて啓示される信仰の時まで閉じ込められていた。このようにして律法は、信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである。しかし、いったん信仰が現れた以上、わたしたちは、もはや養育掛のもとにはいない。あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) なんぢ へいあん
爾に平安、

誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ つた} 主よ、我 永く 爾の慈憐を歌い、我が口を以て世世に 爾の眞實を傳えん、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた} 蓋 我言う、慈慈は永く建てられたり、 爾は 爾の眞實を天に固めたり、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、
ア リル イ ヤ。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

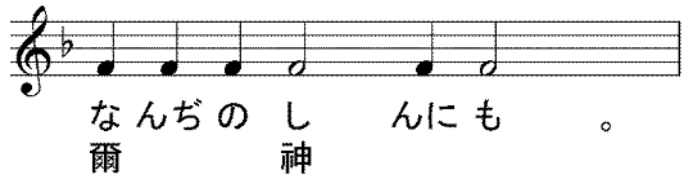
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ わげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし

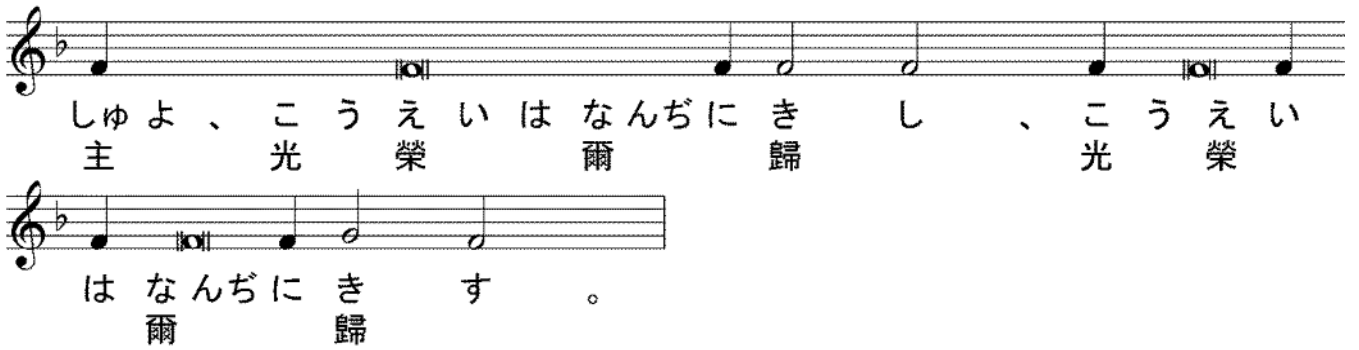
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マルコ福音書 47 端 10 章 32~45 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス、十二徒を召して、己に及ばんとする事を語げて曰

えり、視よ、我等イエルサリムに上る、人の子は司祭諸長及び學士等に付されん、彼等

之を死に定め、之を異邦人に付し、之を辱め、之を鞭ち、之を唾し、之を殺さ

ん、而して彼第三日に復活せん。時にゼウエデイの子イアコフ及びイオアン彼に就きて

曰く、師よ、我等の求むる所、願わくは爾我等の爲に之を行え。彼は之に謂えり、

我が爾等の爲に何を行わんことを欲するか。彼曰えり、我等爾が光榮の中に於て、

一人は爾の右に、一人は爾の左に坐せんことを賜え。イイス彼等に謂えり、爾等の

求むる所を知らず。爾等我が飲む爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くるこ

とを能するか。彼等曰えり、能す。イイス彼等に謂えり、爾等は我が飲む爵を飲み、我

が受くる洗を受けん。然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與うべきに非ず、

乃備えられたる者に與えられん。十門徒之を聞きて、イアコフ及びイオアンを焔れ

り。イイス彼等を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等

其上に權を執るは、爾等の知る所なり、唯爾等の中には斯くある可からず、乃爾

等の中に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し、爾等の中に首たらんと

欲する者は、衆人の僕と爲るべし。蓋人の子の來りしも、人を役わん爲に非ず、

すなわちひと つか かつおのれ いのち あた おお もの あがない な ため
乃 人に役われ、且 己の生命を與えて、衆くの者の 贖 を爲さん爲なり。

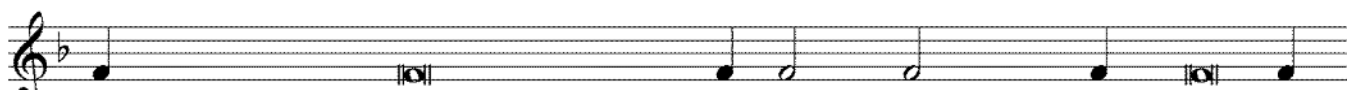
(比較用 口語訳) イエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りはじめられた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。また彼をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるであろう」。さて、ゼベダイの子のヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようお願いいたします」。イエスは彼らに「何をしてほしいと、願うのか」と言われた。すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとりをあなたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。イエスは言われた、「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっているか。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」。彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許されることである」。十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。そこで、イエスは彼らと呼ばせて言われた、「あなたがたの知っているとおりに、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」。

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 33 端 7 章 36～50 節 】

司祭) 彼の時、ファリセイ等の一人 イイススに共に 食せんことを請いたれば、彼はファリセイの家に入りて席坐せり。時に其邑の婦にして罪ある者、彼がファリセイの家に席坐するを知りて、香膏を盛れる玉の盒を携え來り、其後に足の下に立ち、哭きて、涙を以て其足を濡し、己の首の髪を以て之を拭い、其足に接吻して、之に香膏を抹れり。彼を招きたるファリセイは此を見て、己の中に謂えり、此の人若し預言者たらば、彼に捫る者の孰たり、如何なる婦たるかを知らん、蓋是れ罪女なり。イイスス彼に答えて曰えり、シモンよ、我爾に言うべき事あり。彼曰く、師よ、之を言え。イイスス曰えり、或債主に二人の負債者ありて、一人は銀五百枚、一人は五十枚を負えり、其償う能わざるに因りて、彼は二人に免せり、然らば二人の中彼を愛すること孰か多からん、試に言え。シモン對えて曰えり、意うに、多く免されし者ならん。彼は之に謂えり、爾

^{はか} ^{ただ} ^{ここ} ^{おい} ^{おんな} ^{かえり} ^い ^{なんぢ} ^こ ^{おんな} ^み ^{われ}
 が議りしこと正し。是に於て婦を顧みて、シモンに謂えり、爾此の婦を見るか、我
^{なんぢ} ^{いえ} ^い ^{なんぢ} ^わ ^{あし} ^{ため} ^{みづ} ^{あた} ^{しか} ^{かれ} ^{なみだ} ^{もつ} ^わ ^{あし}
 爾の家に入りしに、爾は我が足の爲に水を給えざりき、然るに彼は涙を以て我が足
^{うるお} ^{こうべ} ^け ^{もつ} ^{これ} ^の ^ご ^{なんぢ} ^{われ} ^{せつぶん} ^{しか} ^{かれ} ^わ ^{ここ}
 を濡し、首の髪を以て之を拭えり。爾は我に接吻せざりき、然るに彼は、我が此に
^い ^{とき} ^わ ^{あし} ^{せつぶん} ^や ^{なんぢ} ^わ ^{こうべ} ^{あぶら} ^ぬ ^{しか} ^{かれ}
 入りし時より、我が足に接吻して已めず。爾は我が首に油を抹らざりき、然るに彼は
^{におい} ^{あぶら} ^わ ^{あし} ^ぬ ^こ ^{ゆえ} ^{われ} ^{なんぢ} ^つ ^{かれ} ^{おお} ^{つみ} ^{ゆる} ^{けだし} ^{かれ} ^{おお}
 香膏を我が足に抹れり。是の故に我爾に語ぐ、彼の多くの罪は赦さる、蓋彼多
^{あい} ^{しか} ^{すくな} ^{ゆる} ^{もの} ^{すくな} ^{あい} ^{すなわち} ^{おんな} ^い ^{なんぢ}
 く愛せり、然れども少く赦さるる者は、少く愛するなり。乃婦に謂えり、爾の
^{つみ} ^{ゆる} ^{かれ} ^{とも} ^{せきぎ} ^{もの} ^{おのれ} ^{うち} ^い ^こ ^{なんびと} ^{つみ} ^{ゆる} ^{かれ}
 罪は赦さる。彼と共に席坐せる者己の中に言えり、此れ何人にして罪をも赦すか。彼
^{おんな} ^い ^{なんぢ} ^{しん} ^{なんぢ} ^{すく} ^{あんぜん} ^ゆ
 婦に謂えり、爾の信は爾を救えり、安然として往け。

(比較用 口語訳) あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の家にはいって食卓に着かれた。するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家で食卓に着いておられることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗った。イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」。そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりは五百デナリ、もうひとりは五十デナリを借りていた。ところが、返すことができなかつたので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい」。それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいってきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかつた。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻をしてくれなかつたが、彼女はわたしが家にはいった時から、わたしの足に接吻をしてやまなかつた。あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかつたが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。そして女に、「あなたの罪はゆるされた」と言われた。すると同席の者たちが心の中で言いはじめた、「罪をゆるすことさえするこの人は、いったい、何者だろう」。しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮



※ 聖体礼儀③（聖大ワシリイ）へ